



## 浮腫と下肢深部静脈血栓症 (DVT)

通りすがりの薬剤師 足立博一

浮腫（むくみ）と聞くと心臓、腎臓、肝臓になんらかの障害があるとか、下肢深部静脈血栓症（DVT）、糖尿病、筋力低下、塩分摂取過多、Ca拮抗薬の利用など原因として思い浮かぶ方も多いと思います。本稿ではDVTとの関連を紹介したいと思います。

血液は心臓から動脈へ移り毛細血管を通って静脈に移り心臓へ戻ります。この流れの中で毛細血管壁は緩くなっているため血漿の多くが血管外へ漏出します。血管外はコラーゲンやプロテオグリカンなどで構成される間質で漏出した水分はそこに保持されます。大部分の水分は毛細血管に再吸収され静脈に移り、残りの水分はリンパ管に移りリンパ液となり最終的に静脈と合流します。静脈血は静脈の逆流防止弁や周囲の筋肉の働きによって心臓側へ流れ、リンパ液も周囲の筋肉の働きによって心臓側へ流れます。そこになんらかの原因で静脈弁やリンパ管に不都合が生じると間質の水分が溜まり始めて間質の保持量を越えた水分が浮腫として現れるようになります。浮腫が現れやすい部位は重力の影響を受けやすい下肢で特に筋肉の動きが弱い脛骨前面（むこうすね）、大腿屈側、足背小指側になります。

下肢浮腫と言えばエコノミークラス症候群が有名です。長時間同じ姿勢で座っていると下肢深部静脈に血液が滞留し浮腫になるわけですが血栓形成リスクも高くなりDVTになる場合があります。そして出来た血栓が静脈から心臓を通って肺へ飛ぶと肺塞栓を起こし死に至る場合もあります。例えば下肢深部静脈に血栓があることを知らないままマカオで張り切って歌おうものなら血栓が肺に飛んで突然の呼吸困難を覚え本人は原因も分からず失神して緊急入院するかもしれません。入院すると下肢大静脈内に血栓捕獲用のフィルターが留置され間接的な血栓溶解目的で抗凝固薬のヘパリンやアルガトロバシンの点滴注射が行われます（ウロキナーゼ注射薬では出血リスクが高い）。急性期以降は抗凝固薬ワルファリンやDOACの内服治療になります。下肢の浮腫は血液滞留があると診断されますから血流を促す医療機器の弾性ストッキング装着が併用されます。もしDVT既往の患者さんから再発した浮腫改善のため弾性ストッキングを再び使用したいと相談を受けた時は新しく出来た血栓が肺へ飛ぶ可能性があるのトツキソクを事前に主治医の指示を仰ぐ必要があると指導する必要があります。同様に雑貨類扱いのふくらはぎをサポートする商品もDVT既往の人には注意が必要です。

以上、まるで私が体験してきたかのような話だと思われた方。それはほぼ正解です！

〈著者プロフィール〉

足立博一（あだちひろかず）薬剤師、薬学博士。1980年金沢大学薬学部修士課程修了。1980年富山医科薬科大学（現富山大学）附属病院薬剤部入職。1994年ソノック薬局（現アイソ薬局）入職。1997年富山協立病院薬剤科入職。2002年（一社）ふれあい薬局入職。2005年（有）あだちP A S企画設立。1994年から富山大学薬学部非常勤講師兼務。2024年11月70歳を機に引退。著書：知って納得！薬のおはなし（幻冬舎ルネッサンス新書）。